

# コミュニケーション行為の構造

田 中 義 久\*

1

チャールズ・サンダース・パース (Charles Sanders Peirce, 1839-1914) は、「記号」について、次のように言う。

There are three kinds of signs. Firstly, there are *likeness*, or icons: which serve to convey ideas of things they represent simply by imitating them. Secondly, there are *indications*, or indices: which show something about things, on account of their being physically connected with them. (中略) Thirdly, there are *symbols*, or general signs, which have become associated with their meanings by usage.<sup>(1)</sup>

このように、パースの《記号学》(Semiotics) は、《イコン》、《インデックス》、および《シンボル》という三つの記号の概念の定立とともに、始まった。

第一に、《イコン》は、さまざまな事物 (things) を単純に ‘imitating’ することを通して、表象 (represent) し、そのようななかたちで、それらの事物についての諸観念 (ideas) を伝えるのに役立つ記号、である。それは、ジョン・ロックの「単純観念」(simple ideas) の最初の地平に定位される記号の概念であり、これまで「類線」(有馬道子)・「類似記号」(米盛裕二) などという訳語を当てられて来たそれである。《イコン》を特徴づけるものは、言うまでもなく、「類同性」('likeness') であり、「模倣・模写」('imitating') である。したがって、パースが《イコン》の判りやすい具体例としてあげているのは、写真であり、とくに、‘instantaneous photographs’ であった。しかし、私たちは、この境位にとどまることなく、パースが《イコン》の説明を進めながら、次のように述べているところに、留目しなければならないであろう。

In intercommunication, too, likeness are quite indispensable. Imagine two men who know no common speech, thrown together remote from the rest of race. They must communicate: but how are they to do so? By imitative sounds, by imitative gestures, and by pictures.<sup>(2)</sup>

当然のことながら、写真は、この ‘pictures’ の延長線上にあるものだ。そして、パースは、古代エジプトの象形文字に話を進め、こう述べるのである。

It (the Egyptian language) was, as far as we know, the earliest to be written: and the writing is all in pictures. Some of these pictures came to stand for sounds,—letters and syllables. But others stand directly for ideas. They are not nouns: they are not verbs: they are just pictorial ideas.<sup>(3)</sup>

---

\*たなか よしひさ 法政大学 名誉教授

第二に、《インデックス》は、定義としては、さまざまな事物（things）についての「なにか」（‘something’）を示す記号であり、その「なにか」は、それらの事物とのあいだに物理的な結びつきを持っている。この記号は、《イコン》のように、単純な「模倣・模写」によって、対象を表象するのではなくて、パースが直ちに付け加えている説明にしたがえば、ある事物とその背景にある対象との関係を、時間と空間のそれに置換して、表象するのである。

パースがあげている具体例は、「道路標識」（a guidepost）であり、「関係代名詞」であり、「大声での呼びかけ」（a vocative exclamation）である。「道路標識」は、ある地点で、これから採用されるべき道路を指し示している《インデックス》であり、「関係代名詞」は、ある事物の名前のすぐ後ろに置かれて、ひき続いて、その事物についての叙述を展開しようとする意志を示しており、たとえば、「おーい、そこの人！！」（‘Hi! there’）という「呼びかけ」は、呼びかけられた人の神経にはたらきかけ、その人の注意を喚起する《インデックス》なのである。

パースは、さらに、この記号概念の特徴について、次のような説明を与えている。

To identify an object, we generally state its place at a stated time: and in every case must show how an experience of it can be connected with the previous experience of the hearer.<sup>(4)</sup>

私たちは、このようにして、《インデックス》が、コミュニケーションの過程の裡にあり、コミュニケーション行為の「主体」である人びとの経験の内部で、彼らの《行為》を時間的・空間的に整序する《記号》として位置づけられていることを、理解するのである。パース自身の言葉を用いて言えば、次のようになる。

Anything which focuses the attention is an indication.<sup>(5)</sup>

第三に、《シンボル》は、「一般的記号」（‘general signs’）のことであり、それを用いる行動・行為によって、意味との結びつきが生じて来る（have become associated with their meaning by usage）記号の概念である。パースが挙げている具体例は、大多数の「語」（‘words’）であり、「文節」（‘phrase’）であり、「発話」（‘speechs’）であり、「書物」（‘books’）であり、なんと「図書館」（‘libraries’）もそうである。

Symbol という言葉の語源は、ギリシア語の ‘sumballō’ にまで遡り、その原意は、‘sum + ballō= throw’ である。パースは、この点について、次のように述べている。

Etymologically, it should mean a thing thrown together, just as *ἔμβολον* (embolus) is a thing thrown into something; a bolt, and *παράβολον* (parabolum) is a thing thrown besides, collateral security; and *ὑπόβολον* (hypobolum) is a thing thrown underneath an antenupital gift.<sup>(6)</sup>

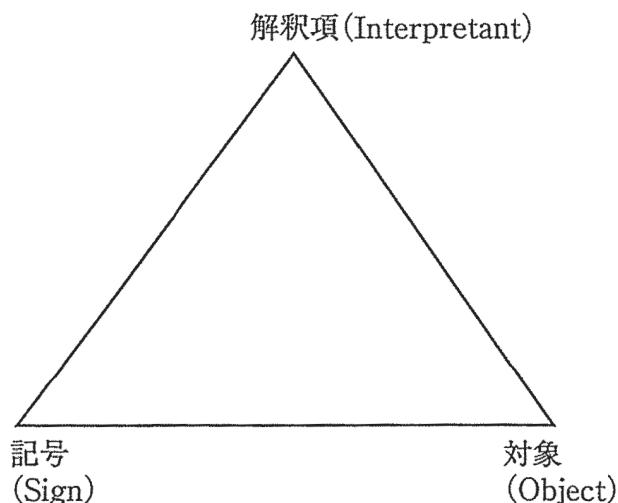
このようにして、《シンボル》の語源的な意味は「一緒に投げる、共に投げ入れる」（‘throw together’）であるけれども、パースは、さらに、古代ギリシアでこの語が用いられる場合には、そこに、‘to signify the making of a contract or convention’ という社会的な意味作用（signification）が付随していたことに、注目する。

Now, we do find symbol (*σύμβολον*) early and often used to mean a convention or contract. Aristotle calls a noun a “symbol”, that is a conventional sign. In Greek, a watch-fire is a “symbol”, that is, a signal agreed upon: a standard or ensign is a “symbol”, a watch-word is a “symbol”, a badge is a “symbol”: a church creed is called a symbol, because it serves as a badge or shibboleth: a theatre-ticket is called a “symbol”.<sup>(7)</sup>

たしかに、「見張りのためのかがり火」は、一定の《コード》にもとづく合意を前提とした「シグナル」であり、軍旗・艦旗・合言葉も、同様にして、特定の集団や社会関係の地平での《コード》とそれに由来する合意の存在にもとづく記号である。教会の信条が《シンボル》と呼ばれたのも、それを知っていること、あるいは発話することが、その教会の信徒であることを証明する「バッジ」であり、「異教徒から区別するための合言葉」(shibbolech)となっていた、からである。劇場の切符や、荷物の受け渡しのための割符も、当代の社会関係の地平での「慣習」(convention)や「契約」(contract)の存在を前提として、《シンボル》と呼ばれていたのであった。

パースは、このような《イコン》、《インデックス》および《シンボル》という三種類の《記号》の概念を指定しつゝ、マス・コミュニケーション研究における古典的な視座のひとつとしての、あの《記号》(Sign) —— 《対象》(Object) —— 《解釈項》(Interpretant) のトリアーデに関わるシェーマを、提起したのである。私は、かねがね、このトリアーデについてのパースの「基本的シェーマ」がほとんどの入門書・研究書において言及されているにもかかわらず、それを、さらに、パースの《存在論》の主柱とも言うべき「第一次性」(firstness)、「第二次性」(secondness)、および、「第三次性」(thirdness) という「深さの三水準」に関連づけて論じられることが無いのを、奇異に思っていた。

第1図 パースの基本的シェーマ



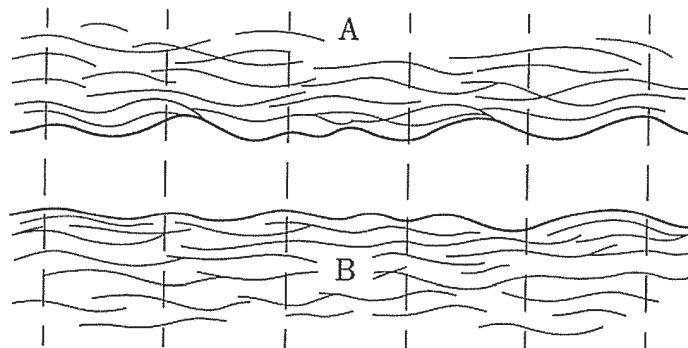
(出所：田中義久『コミュニケーション理論史研究（下）—記号論からコミュニケーション行為の地平へ—』(2014年、勁草書房)、46頁。)

パースは、《記号》(Sign) を「第一次性」の地平——偶然性の地平であり、現象論のレベル——に位置づけ、《対象》(Object) を「第二次性」の地平——運動 (Synechism) の地平であり、段階論のレベル——に定位し、さらに、《解釈項》(Interpretant) を「第三次性」の水準——パースが「アガペー主義」(Agapism) と呼ぶ価値の基盤であり、原理論のレベル——に、措定しているのである。私は、とくに、画家セザンヌ (Paul Cézanne, 1839-1906) の「コミュニケーション行為」をとりあげながら、運動 (Synechism) について、後論することになるであろう。

## 2

フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand-Mongin de Saussure, 1857-1913) の「記号論」('Semiology') の原風景は、次のような素描であった。彼は、1908年11月の第一週から1909年6月24日にかけて実施したジュネーヴ大学における「一般言語学講義」の第二回講義のなかで、《波動》のモデルを教室の黒板に描きながら、《音》と《意味作用》の関係を、説明しようとしたのである。図のなかで、(A) は、直接的には「空気」(l'air) であり、(B) は、同様にして、「水」(l'eau) である——ソシュールの言葉を用いて言えば、‘Comparaison de deux masses amorphes: l'eau et l'air’ である——。

第2図 《音》と《意味作用》の関係



(出所：田中義久『コミュニケーション理論史研究（下）—記号論からコミュニケーション行為の地平へ—』(2014年、勁草書房)、189頁。)

ソシュールは、「空気」(A) と「水」(B) とのあいだに生ずる《さざ波》のイメージによって、記号現象の過程における《意味》の生成を、とらえようとしているのであった。「空気」の圧力—— la pression atmosphérique ——の変化について、「水」の表面は、ソシュールのいわゆる ‘une succession d'unités’ へと、そのかたちを変える。これが「波」(la vague) であり、私たちは、「空気」と「水」のあわいにありつゝ、不斷に変化しつづける《さざ波》として、《音》(SONS) と《意味作用》(SIGNIFICATION) の関係を、とらえなければならないのである。ソシュールは、この「空気」と「水」との連接のうちに生成する無数の《さざ波》を “chaîne intermédiaire” という含蓄に富んだことばで表現しているけれども、この過程と運動のなかから、《音》と《意味作用》の結合のかたちとしての「形相」('forme') が生み出されて來るのであって、それが、具体的には、

「音節」(la syllabe) であり、「分節」(l'articulation) となるのであった。

私たちは、ソシュールの《記号論》(Semiology) の要諦を  $\frac{Sa}{Sé}$  のシェーマによって理解しようとする場合が多いけれども、しかし、‘Signifiant’(能記——意味するもの——) と ‘Signifié’(所記——意味されるもの——) の関係を正確に理解するためには、ひとまず、この《原風景》にこそ、立ち帰らなければならないのであろう。

ソシュールの《音》と《意味作用》の関係についての前掲のシェーマは、私に、ドビュッシー (Claude Achille Debussy, 1862-1918) の音楽世界のなかでの「水面に映る影」(*Reflets dans l'eau*) や「月の光」(*Clair de lune*)、そして、「映像」(*Images*, 1905 年と同 7 年のピアノ曲集、および、最晩年の 12 年にかけての管弦楽曲) を、想起させる。

しかもなお、ソシュールの「認識論的」記号論の基本的性格は、次の三点にある。

第一に、《記号》現象のなかでの「歴史と人間」についてのソシュールの視点が、重要である。彼は、みずからの講義ノートのなかで、次のように述べる。

Plus on étudie la langue, plus on arrive à se pénétrer de ce fait que *tout* dans la langue est *histoire*, c'est-à-dire quelle est on objet <d'analyse> historique, et non <d'analyse> abstraite, quelle se compose de *faits*, et non de *lois*, que tout ce qui semble *organique* dans la langue est en réalité *contingent* et complètement *accidental*.<sup>(8)</sup>

そして、その上で、彼は、実際の講義において、このように言うのである。

Pour savoir dans quelle mesure une chose est, il faudra <rechercher> dans quelle mesure elle est dans la conscience des sujets parlants, elle signifie, <Donc, une seule perspective méthode observer ce qui est ressenti par les sujets parlant.<sup>(9)</sup>

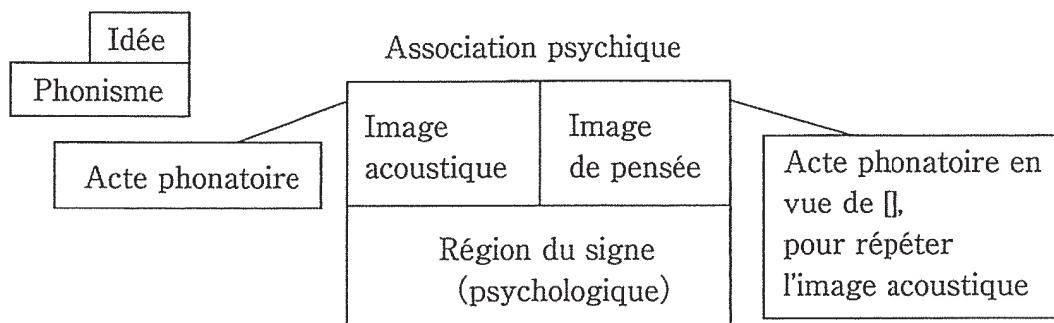
ソシュールは、前者において、「言語のなかのすべては歴史である」と述べ、他方、後者にあって、「発話する主体」(des sujets parlants) への留目の重要性を主張し、その主体の「意識の内にあるもの」、その主体によって感じられているもの (ce qui est ressenti par les sujets parlants) を分析しなければならない、と述べている。ソシュールに従うならば、私たちは、記号現象とコミュニケーション行為を分析する際に、記号現象を「ひとつの歴史の所産としての客体」(<un objet> historique) であるとしつゝ、コミュニケーション行為を「みずからの能力を実現しようとする個人の活動」(l'acte de l'individu réalisant sa faculté) として、解明しなければならないのである。

第二に、ソシュールによれば、前述の《音》(SONS) と《意味作用》(SIGNIFICATIONS) とのあいだの「ひとつの《対応》する関係」(UNE <Correspondance>)、「それらのあいだの相関する関係」(leur corrélation) は、「まったく心的なものであり、主体のなかに生成する」(qui sont toutes deux psychiques et dans le sujet)。私たちは、「聴覚映像は、物質音ではない。それは、音の心的な刻印なのだ」(une image acoustique <n'est pas le son matériel>, c'est l'empreinte

psychique du son.) というソシュールの述懐を、重く受けとめなければならないのである。

第3図 ソシュールの基本的シェーマ

Au lieu de



(出所：田中義久『コミュニケーション理論史研究（下）—記号論からコミュニケーション行為の地平へ—』（2014年、勁草書房）、172頁。)

第三に、私たちは、ソシュールの《価値》論に注目する必要があるだろう。彼は、次のように、主張する。

La valeur d'un mot ne sera jamais déterminée que par le concours des termes coexistants qui le limitent.<sup>(10)</sup>

「ある語 (un mot) の価値は、共存する諸辞項の 'le concours' によってのみ、決定される」というソシュールの視点は、チャールズ・サンダース・パースの記号論の場合には、まったく存在しない。なお、「le concours」とは、ごく普通の意味では、「コンクール（競争）」ということになるけれども、原義としては、「集合」・「結合」・「協力」 (collaboration) という意味であり、現代語の《コラボレーション》のニュアンスに近い。しかし、私は、さらに、この言葉のラテン語の語源 'concurrus' とその動詞 'concurrō' にまで遡った方が、ソシュールの主張したかった事柄の本意を一層よく理解できるのではないか、と思う。'concurrō' とは、「ともに走る」、「いそぎ集まる」、「遭遇する」、「つかみ合いになる」、「あるものに向って突進する」、「同時に起こる」、「落ち合う」という、ダイナミックな「意味作用」を内包した言葉である。したがって、ソシュールが「ある語 (un mot) の価値は、共存する諸辞項の 'le concours' によってのみ、決定される」と述べる時、私たちは、ある語 [X] の周辺に、時を同じくして、「ともに走り」、「いそぎ集まり」、場合によって「つかみ合いになる」ようななかたちで、「落ち合う」多数の、a …… n …… z までの、記号の力動的な《集合》を、イメージしなければならないのであろう。

そして、ソシュールは、さらに、次のように主張するのであった。

La valeur est donnée par d'autres données: elle est donnée, en plus de la signification, par le rapport entre un tout et une certaine idée, par la situation réciproque des pièces dans la langue. C'est la valeur elle-même qui fera la délimitation: l'unité n'est pas délimitée fondamentalement, voilà ce qui est particulier à la langue.<sup>(11)</sup>

こうして、《意味》と《価値》とが、連接し重合したかたちで、二重性においてとらえられていることが、ソシュールの記号論の顕著な特色であるだろう。ソシュールに従えば、「価値は、他のさまざまな所与 (d'autre données) によって、与えられる」のであり、「それは、ひとつの全体と、ある特定の観念とのあいだの関係によって、与えられる」のであり、さらに、「それは、《ラング》のなかの諸部分のあいだの、相関しあう状況 (la situation réciproque) によって、もたらされる」のである。そして、言うまでもなく、《ラング》のなかの諸辞項の「ともに走り」、「いそぎ集まり」、場によって、「つかみ合いになる」ようななかたちで、「落ち合う」多数の記号の《集合》を、「ある特定の観念」(une certaine idée) を焦点とする「相関しあう状況」——ソシュールの言う意味での《体系》(le système) ——へと、クローズアップし、整序するのが、コミュニケーション主体としての《人間》の意味作用 (la signification) に、ほかならないのである。

ソシュールは、このような「示差的価値」(la valeur différentielle) の概念を提起することにとどまることなく、さらに、ローザンヌ大学で「一般均衡の理論」を講義していたレオン・ワル拉斯たちの「限界効用 (marginal utility)」の理論の視座からの影響のもとに、《真》・《善》・《美》の「基本的価値」についても研究を進めようとしていたけれども、この試みは未完のままに終っている。

## 3

私は、この50年余り、社会学の視座から、マス・コミュニケーション研究を進め、とくにテレビ視聴行動の領域を中心として、《実証》から《理論》へ、そして《理論》仮説から《実証》による検証へ、という往復運動の研究実践を通じて、日本社会における私たち日本人の《コミュニケーション行為》—《文化的》社会関係の構造的連関とその変様を、分析して来た。そこには、次のような、二つの特徴が含まれていた。

第一に、私のマス・コミュニケーション研究が社会学の視点から開始されたという事実によって規定されて、私の《コミュニケーション行為》の概念は、ひとまず、社会的行為 (Social Action) のモデルを前提としていた、という特徴がある。よく知られているように、社会学には、マックス・ウェーバーから、タルコット・パーソンズを経て、モーリス・メルローポンティへという《行為》概念の展開が見出されるけれども、私は、この展開を踏まえて、次のような、社会的行為のモデルを、提起した。

$$\begin{aligned}
 V = A & \left\{ \begin{array}{l} \text{①価値体系} \\ \text{②信念体系} \\ \text{③分析体系} \\ \text{④パーソナリティ特性} \end{array} \right\} + G \left\{ \begin{array}{l} \text{①認識} \\ \text{②表現} \\ \text{③伝達} \\ \text{④制作} \end{array} \right\} \\
 & + S \left\{ \begin{array}{l} C \left\{ \begin{array}{l} \text{①環境} \\ \text{②役割} \end{array} \right\} \\ M \left\{ \begin{array}{l} \text{③記号} \\ \text{④機械} \end{array} \right\} \end{array} \right\}
 \end{aligned}$$

$$+ N \left\{ \begin{array}{l} ① \text{行為者の規範的価値} \\ ② \text{集団・組織の規範的価値} \\ ③ \text{社会の規範的価値} \\ ④ \text{《類》としての人間の規範的価値} \end{array} \right\}$$

V (Verhalten) : 社会的行為 A (Actor) : 行為者

S (Situation) : 状況 C (Condition) : 条件

M (Means) : 手段 N (Normative Orientation) : 規範的志向 (方向づけ)

第二に、私たちの社会学の視座からすれば、人びとの日常生活のなかで、《コミュニケーション行為》は、それ自体として、独立して存立し得るものではなく、基本的に、《労働》という社会的行為との「相対性」の裡に在り、そのようなものとして、具体的な日本人の日常性を醸成している、と考えられる。したがって、私のマス・コミュニケーション研究において、《コミュニケーション行為》は、上記の社会的行為のモデルを前提として、

(1) コミュニケーション行為

$$V' = A + G \left\{ \begin{array}{l} ① \text{認識} \\ ② \text{表現} \\ ③ \text{伝達} \end{array} \right\} + S \left\{ \begin{array}{l} C \\ M_{③} \text{ (記号)} \end{array} \right\} + N$$

としてモデル化され、

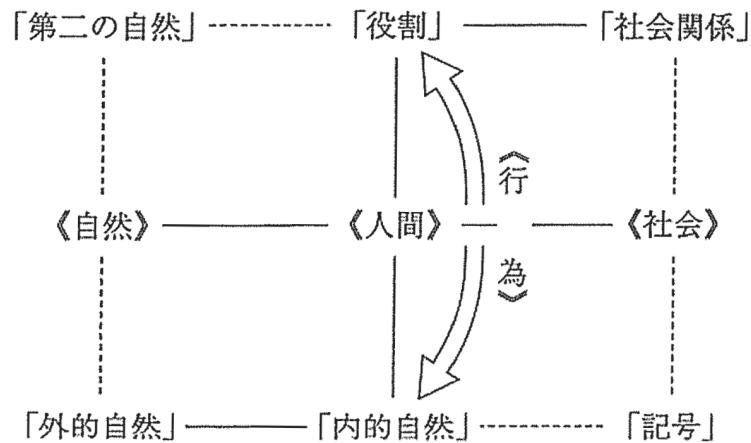
(2) 労働

$$V'' = A + G \left\{ \begin{array}{l} ① \text{認識} \\ ② \text{表現} \\ ④ \text{制作} \end{array} \right\} + S \left\{ \begin{array}{l} C \\ M_{④} \text{ (機械)} \end{array} \right\} + N$$

という、《労働》のモデルとの相関において理解され、分析されなければならないのである。

私は、ここで、このような第二の特徴を一層よく理解していただけるように、少し違った角度からの説明を付け加えておくことにしたい。私の社会的行為の概念は、理論的には、次のような「行為のマトリックス」から、導出されている。

第4図 行為のマトリックス



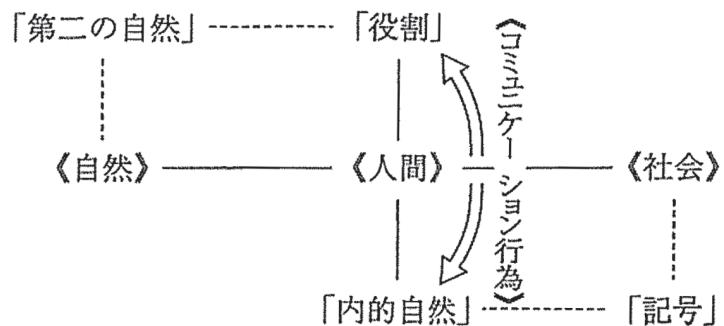
(出所：田中義久『社会関係の理論』(2009年、東京大学出版会)、66頁。)

このマトリックスのなかで、「第二の自然」とは、見かけ上、《反自然》もしくは《非自然》の装いをもってあらわれている都市、街路、劇場、広告、デザイン、流行、ファッション、映画、テレビ、ラジオ、インターネット、スマートフォン、AIその他、いわゆる《文明》の内容のことである。

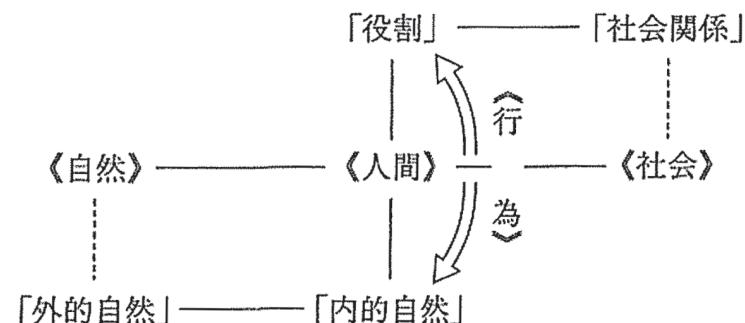
そして、この「行為のマトリックス」の視角からとらえるならば、《コミュニケーション行為》と《労働》は、次のようななかたちで、理解されることになるであろう。

第5図 コミュニケーション行為と労働

(1) コミュニケーション行為



(2) 労働

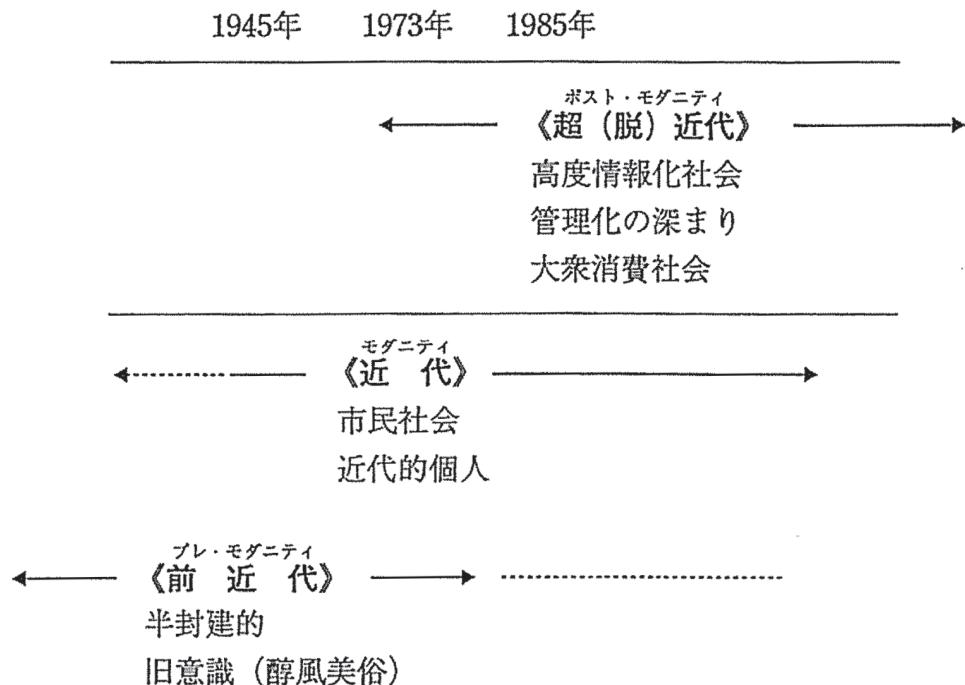


(出所：田中義久『社会関係の理論』(2009年、東京大学出版会)、247頁。)

私たちの日本社会は、明治維新以後 150 年の《近代化》の歴史過程を経て、今日、高度情報化社会・大衆消費社会・管理社会の重合する最先端の資本主義社会として現前しているわけであるが、この歴史過程を産業構造のもっとも具体的な表現としての「就業構造」の側面から考察するならば、その出発点としての 1872 年（明治 5 年）の段階では、第一次産業の就業人口が全体の 85% を占めていたのであり、この段階での第二次産業の就業人口は 5%、第三次産業のそれが 10% と、文字通りの「農耕社会」にほかならなかった。しかし、この構造は、第二次世界大戦の敗戦後の「復興」の過程で急激に変化し、1955 年頃に第三次産業の就業人口が第一次産業のそれを上回るようになり、その後、1960 年頃には、第二次産業の就業構造が第一次産業の構成比を超えて行ったのである。そして、1985 年（昭和 60 年）を転機として、第二次産業に従事する人口のウェイトも減少に転じたのであって、遂に、2000 年（平成 12 年）には、第一次産業が 5%、第二次産業が 35%、第三次産業の就業人口が 60% に達し、いわゆる「インターネット社会」の産業構造を生み出したのであった。

私自身は、このような《近代化》過程の所産である現代日本社会を、第 6 図のような範式によってとらえている。

第 6 図 現代日本社会の範式



(出所：田中義久『社会関係の理論』(2009年、東京大学出版会)、234頁。)

私のテレビ視聴行動の実証的分析のデータに依拠するかぎり、平成の時代における「情報化」の進展について、コミュニケーション行為の「主体」としての視聴者の生活意識は、この範式に照らして言うならば、《近代》の契機を弱めつゝあり、むしろ、《超（脱）近代》と《前近代》の両契機の増大と癒合の傾向を強めている。

このような状況をコミュニケーション行為の構造に関わる問題状況として理解するならば、それ

は、まず、以下の二つの問題として、具体化されるであろう。

第一に、前述したコミュニケーション行為のモデルにおける  $S \leftarrow \begin{smallmatrix} C \\ M_{(3)} \end{smallmatrix}$  の「記号」と、今日のいわゆる「インターネット社会」の「情報」の概念との「照合」・「つきあわせ」が必要である。パースの場合、「記号」は、具体的には、《イコン》、《インデックス》、《シンボル》の三つのタイプから成っていた。そして、ソシュールは、広義の ‘Signe’ であって、その類型区分を明示していないけれども、彼の記号論の「正統の嫡子」とも呼ぶべきロラン・バルトは、「記号」を、《signal》、《indice》、《icône》、《symbole》、《signe》、《allégorie》という 6 つのタイプに分けて論じている。

私たちは、ほとんど毎日、あたり前のようにして大小さまざまな大きさのコンピューターの「モニター」を用い、その画面上の《アイコン》という小さな矢印を駆使して、無数の情報処理の行為を、行なっている。そして、この《アイコン》は、字義通りに言えば、パースの記号分類に登場していた《イコン》(icon) そのものなのである。周知のように、英語の ‘Icon’ は、もともと、「彫像」であり、とくにギリシア正教で重用される「聖像」・「聖画」を意味していたフランス語の ‘Icône’ も、同様にして、ギリシア正教の「聖画像」(image sainte) を意味し、わざわざ、「イコン（木の羽目板に描いたもの）」(伊吹武彦他編『仏和大辞典』白水社) と、「板絵」であることを強調している。

実は、日本社会における《情報化》の進展は、「情報」の概念規定を後回しにして開始されている。経済審議会情報研究委員会『日本の情報化社会——そのビジョンと課題——』(1969年、ダイヤモンド社) は、「情報とは、ある特定の目的のために活用できる“表現された事象の内容”」(同書18頁) と規定するけれども、これは、ロラン・バルトの 6 つの《記号》の分類とどのようにクロスオーバーするのか、まったく不分明である。他方、フランスのミッテラン大統領の政策立案顧問として、1980 年代後半から 90 年代初頭——丁度、日本の「バブル期」とその破裂・崩壊の時期にあたる——、フランス社会における《情報化》の進展の一翼を主導したジャック・アタリは、*La parole et l'outil* (1979、Presses Universitaires de France) で、「情報は、はやり言葉になっている。どこにでも通用する言葉なのだ。だがそれは、多義性をもち科学的な厳密さを欠くために、危険な言葉もある。にもかかわらず、要となる言葉なのだ」と、述べていた。

私は、いわゆる「インターネット社会」としての今日の「高度情報化社会」の段階にある国家独占資本主義社会において、「情報の一般理論」が提起されないままに、毎日毎に《情報化》が急ピッチで進められている状況を、きわめて奇異な事態だ、と考えている。アタリは、少くとも、《情報》を ‘signal’ と ‘symbole’ に相關させていたけれども、前述のバルトの 6 つの《記号》概念との照応の水準において、《情報》の概念の内容を明確にすることが、若手研究者の皆さんに求められていると言うべきであろう。

第二に、私たちは、コミュニケーション行為の構造モデルのなかの、A<sub>④</sub>パーソナリティ特性と C<sub>①</sub>環境の《双対性》に、留目する必要がある。パーソナリティ特性 (Personality Traits) とは、具体的には、コミュニケーション行為の「主体」の内部における感性・欲求・欲望であり、私が長年用いて来ている言葉で言えば、「内的自然」であり、《人間的自然》の諸力である。

これに対して、C<sub>①</sub>環境とは、それ自体としては、自然環境、社会環境および「記号環境」の総体にはかならない。しかし、すでに、「インターネット社会」における「第二の自然」について言

及して来たように、今日の「高度情報化社会」のコミュニケーション行為は、圧倒的に多くの部分において、「記号環境」と社会環境の範囲内で展開されており、自然環境は、その多くが《画像》(Images)としての似而非自然であり、ヴァーチャルな「自然」である。事柄は、第一次産業に対して第三次産業に就業する人びとの割合が圧倒的に多数を占めるようになり、人びとの《労働》そのものが、実質において、《コミュニケーション行為》によって、とて代られつゝある今日の労働の現場を見ても、明らかであろう。

画家セザンヌは、故郷の山サント・ヴィクトワールを対象として、1870年頃から1906年にかけて、31歳から最晩年の67歳まで、油彩38点、水彩40点、素描6点、併せて84点の作品を残している。最初の頃のサント・ヴィクトワール山の《絵》は、きわめて素直な遠近法による風景画であったけれども、1896～98年頃から、「一点透視画法」の視座による絵画へと変化して行き、エクスの市街や鉄道橋、そして、山の中腹、左側に所在する「シャトー・ノワール」の建物も、その「窓」・「屋根」などの具体性を喪失して行くのであった。それらの個別・具体的な「オブジェ」('objet')は、ひとつの「箱」もしくは「長方形」の色の面となり、それらとまったく対照的に、画面の中央から上部にかけて、サント・ヴィクトワールの山の全景がどっしりとした重量感(重み)と深い奥行きを具備して、すなわち、圧倒的な《ボリューム》を持って、傲然とせり出して来るように、セザンヌの「画像言語」(Bildsprache)は、劇的に、変化するのである。

セザンヌは、亡くなる二年前の四月、エミール・ベルナールへの手紙のなかで、次のように記していた。

For us mortals, however, nature is far more than just the surface, and this is why, in order to help us feel the atmosphere, we have to introduce blue tones into the light, whose movement is represented by reds and yellows.<sup>(12)</sup>

ここで、彼が‘whose movement’と呼んでいるのは、直接的には、サント・ヴィクトワールの山肌の背後に潜む《マグマ》のほむらであり、より本質的には、アンドレア・グランディエーゼが‘cinétique d'organesé’(「動力学的な造山運動」)と述べている《自然史的運動》そのもの、にほかならなかった。

セザンヌの《画像》そのものが、チャールズ・サンダース・パースの記号論の「第一次性」(偶然性・偶有性)の地平から、第二次性」(シネキズム、‘Synechism’)のそれへの、深化を実証し、例証しているのである。

私たちは、ここで、《人間的自然》(Human Nature)の諸力と《全自然史的運動》とのあいだの、人間自身のコミュニケーション行為による‘mediation’の努力と、その36年間にも及ぶ「表現」・「実現」の過程の所産としての《美》的価値の生成・たちあらわれを、眼にしているのである。サント・ヴィクトワール山(標高1,011m)の最左端のピークには、‘Croix de Province’という大きな十字架が立っているけれども、それは、セザンヌの84点の《画像》のなかで、完全に消えて行くのである。

## 注

- (1) Charles Sanders Peirce (以下 C. S. Peirce と略称), ‘what is a Sign?’ 1894. Nathan Houser and Christian Kloesel, eds., *The Essential PEIRCE*, volume 2 (1893-1913), Bloomington, 1998, P.5.
- (2) *ibid.*, P.6.
- (3) *ibid.*, P.7.
- (4) *ibid.*, P.7.
- (5) *ibid.*, P.8.
- (6) *ibid.*, P.9.
- (7) *ibid.*, P.9.
- (8) Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, edition critique par Rudolf Engler, tome 1, Otto Harrassowitz, 1968. tome 2, fascicule 4, 1974, P.5、断章番号、3281.
- (9) *ibidem.*, p.200、リードランジェのノート、第二回講義、断章番号、1504.
- (10) コンスタンタンのノート、第三回講義、断章番号、1875.
- (11) リードランジェのノート、第二回講義、断章番号、1862.
- (12) Isabelle Cahn, *Paul CÉZANNE—A Life in art*—, Foreward by Françoise Cachin, Cassell, 1995. p.115.

## 文献

- Locke, John, 1689, *An Essay concerning Human Understanding*, ed. by Peter H. Nidditch. Oxford. the Peirce Edition Project, ed, 1998. *The Essential PEIRCE*, volume 2 (1893-1913), Blooming ton.
- Saussure, Ferdinand de., 1974. *Cours de linguistique générale*, edition critique par Rudolf Engler, Otto Harrassowitz.
- Barthes, Roland, 1994. *Oeuvres complètes*, Seuil.
- Attali, Jacques, 1979, *La Parole et L'Outil*, (平田清明・齊藤日出治訳、『情報とエネルギーの人間科学—言葉と道具—』、1983年、日本洋論社).
- 経済審議会情報研究委員会 『日本の情報化社会—そのビジョンと課題—』、1969年、ダイヤモンド社。
- Cahn, Isabelle *Paul CÉZANNE—A Life in art*—, Foreward by Françoise Cachin, 1995, Cassell.
- 谷川渥編、『記号の劇場』、1988年、昭和堂。
- 田中義久、『社会関係の理論』、2009年、東京大学出版会。
- 田中義久、『コミュニケーション理論史研究（上）コミュニケーションからコミュニケーションへ』、2000年、勁草書房。
- 田中義久、『コミュニケーション理論史研究（下）記号論からコミュニケーション行為の地平へ』、2014年、勁草書房。
- Grandiese Andrea, *Les Alpes*, 2001, Arehaut.

